
Cross universe 2 ～時空を超えた友情～

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross universe 2 　　（時空を超えた友情）

【Nコード】

N0674BA

【作者名】

百花

【あらすじ】

賢者の石。それはあらゆる物を黄金に変え、不老不死すら可能にする魔性の石。それを巡る三つ巴（四つ巴？）の争奪戦の結末は…
…。過去と未来を巡る冒険が今、始まる！！

CHAPTER..0 時空賊団・エヴォリユース

くくと、青年は喉を低く鳴らした。背中まで垂れる、艶やかな黒髪をかきあげ青年はゆったりと背もたれにもたれかかる。

「それで俺を頼ったんだ？ 勝てないって、よーやく分かったから」若い男は、子供っぽい口調で蔑むように笑う。だがその言葉尻は楽しげな色が溢れていた。

男は、古い西洋によく見られる羽根帽子を、ゆっくりと押し下げた。その身なりは、海賊。

赤いコートに、揃いの帽子。

さらに目を引くのは、左手。

古典的にフック、という訳ではないがその手は僅かに鉄色を帯び義手であることを表していた。

青年は、目の前のモニターで必死に語る老年の男を眺めていたが、不意に首を振った。

「もういいよ」

青年は義手をモニターに突きつける。

「報酬は、弾むんだろね？ ドクター？」

語尾を上げ、青年は笑む。

「オーケー、商談成立だ。金払いはきっちり頼むぜ？ ドクター」

ああと頷く相手に、青年はきりりと眉を釣り上げた。

「ならこのキャプテン エヴォリユースに任せとけよ。その『賢者の石』しっかり盗んでやろうじゃないの！」

胸が躍る。エヴォリユースはにまりと笑った。

モニターが閉じられる。

「おら、野郎共！！ 船出の時だ！！」

櫓を飛ばしたエヴォリユースは、椅子から立ち上がる。

「目的地は？」

部下の声に、エヴォリユースは声を張り上げた。

「『21世紀初頭』……日本だ!!」

男の声に、部下達は一斉に動き出す。

窓の外に見える景色が、ひゅんひゅんと流れる。

そして、アヴァリティア時空賊団のタイムマシンは海賊旗を振り上げ進んで行った。

T o b e c o n t i n u e d

CHAPTER..1 そして歴史は動き出す

「だっ！」

「うわっ!!」

鈍い音に続いて、悲鳴。弥々華はぺたりと地面に腰を下ろし、呻き声を上げた。

「痛ってー……」

「ご、ごめんなさい」

「いや、大丈夫だよ。冬樹」

慌てた調子で散らばった本を掻き分ける冬樹に弥々華は苦笑した。階段の曲がり角で2人は激突したのだ。しかも冬樹は大量の書籍やら紙束を抱えていたから、それが飛んで散らかった。軽い惨状に、2人は頭を抱える。

「片付けるの、手伝うよ」

「あ、いえ大丈夫ですよ？」

「いいからいいから」

冬樹を軽くなだめた弥々華は、紙をまとめる。全て手書きのレポ―トだと分かった弥々華は、内心関心せざるを得ない。

「相変わらず熱心だね。錬金術について？」

弥々華は紙束をまとめると、手渡した。

「はい。えっと、こんど出る発表会で西澤さんとプレゼンするんです。だから頑張らなくちゃ」

「そっか、頑張れよ」

「ありがとうございます」

冬樹も本をかき集め終わったらしく、片手で不器用に本を抱えたまま受け取った。

階段に本を置くと、そのまま枚数を確認した。

「良かった……揃ってる」

冬樹は全てを改めて確認し直すと、1つ頷きリビングへ歩いていっ

た。

弥々華は何気なくその背中を見送り、歩き出す。

※※※※

薄暗いラボの中、クルルは静かに笑い声を上げた。

モニターに表示されているのは深紅を更に深くした、血のような色合いの宝石の姿だった。

ごろりと乱雑に形作られた石は、芸術的なカットを施せばかなり高価なアクセサリーに使われる事請け合いな光沢を放っていた。

だが、モニターに表示されているデータはそんなに生易しい物でない。

物々しい計算式。不吉な単語。血にまみれた歴史。

そんな物が、ずらずら並べられている。

「こんな石ころが……」

クルルの言葉は、そこで途切れた。

リビングの監視カメラが、冬樹の姿を捉える。レポートやら本やらに踊る言葉に、クルルは柄にもなく苦笑した。

「冬樹……奇遇にも程があるなあ」

更に切り替わったモニター。

そこに踊る文字。

それは、『賢者の石』。

※※※※

暑いと、弥々華は額の汗を拭う。季節は折しも、7月。

今年の猛暑に内心悲鳴を上げながら、弥々華は立ち止まった。

「この辺かな？」

A p d s c o から、弥々華にとある任が下されたのが1時間前の事。普通なら存在しない、エネルギー反応を感じ。調べた結果、今まで存在しなかった反応がほん一瞬検知された。

その反応は空間転移に使われる物ではなく、まるで時空を歪めたような反応であった事が問題となった。

時空が歪むなど、人為的以外にはありえない。

故にA p d s c o は弥々華に命令を下した。

怪しい物は無いか見てこい、ついでに反応も調べて来い、と。

「アバウト過ぎるんだよねえ……署長も」

渡された検知計を振りながら、弥々華は呻く。

その検知計がピッピッと鳴り出したのを聞き、弥々華は手を止めた。

「こっちか」

※※※※

「冬樹殿」

「あ、軍曹」

一方、こちらは日向家リビング。ソファーに座り、本とレポートを見比べる冬樹の隣にケロロが腰掛けた。

「こっちは掃除・洗濯、終わったでありますよー……って忙しそうでありますな」

「まあね、でももう少しで終わるよ?」

冬樹はレポートから目を離さず答える。ケロロは何気なく散らかったレポートや本に目をやった。

「錬金術でありますか」

「軍曹も知ってるの?」

「地球^{こつち}に来る前に、歴史で読んだであります！」

妙に満足げな表情に、冬樹も僅かに表情を緩めた。
その時であった。

「ただいま戻ったよ」

響いた弥々華の声に、ケロロが立ち上がる。

「あ、弥々華殿ー。どこ行ってたでありますか？」

リビングから顔を覗かせたケロロに、弥々華は疲れた顔を見せた。

「外で仕事。いや、暑い暑い」

ケロロを追い掛けるようにリビングに入った弥々華は、持っていたペットボトルに口を付けた。

「よし、終わったー」

一方、冬樹はレポートが完成したらしく幸せそうな声を上げた。

「お疲れ様であります！」

「アイス買ってきたけど食べる？」

早々に箱アイスを取り出した弥々華は、赤いアイス——イチゴ味の氷菓——を口にくわえ笑った。

「おおっ！ 食べるであります！！」

「ふきな^{ふきな}のへらんれー。冬樹は？」

好きな選んでと聞き取った冬樹が、箱を覗き込む。

「あ、メロンもらっていいですか？」

「ろーぞ」

ケロロと揃って緑の棒をくわえる冬樹を横目に、弥々華もソファーに座る。何気なく積まれた資料に目をやった時だった。

「ん、博物館？」

珍しい資料だと思いつつ、弥々華は何気なく手に取る。

パラパラとめくると、プリントアウトされた資料はたった1つの物を解説していた。

「綺麗な石」

血のように赤い石。

不透明ではあるが、不思議な透明感を持ってその石は存在していた。

「賢者の石ですよ」

「賢者の石？」

冬樹がこくりと頷いた。

「ありとあらゆる物体を黄金に変える石です。これから取れる液体は、不老不死をもたらししてくれるとか、なんとか。錬金術の最終目標なんです」

「へえー」

弥々華が関心しきったような声を出す。内心、拍手。

「今は大英博物館にあるんですよ。見に行ってみたいなあ」

ケロロは弥々華から資料を抜き取りじいっと眺めていたが、不意にげろり、と笑う。

「弥々華殿」

ひよいとケロロは弥々華の耳を引っ張った。弥々華の体が傾ぐ。

「なに？」

「あれ、侵略に使えるそうですね。弥々華の体が傾ぐ」

ひそりとケロロが口を開いた。

「いや、あれは盗めくない？」

「クルル連れてって調査させるのは？ 構造分かれば量産出来るであります。で、がっぽり儲け」

「なら行けるね。行く？ 大英博物館」

弥々華の表情は悪戯っぽいそれになる。

「もちろんであります」

ケロロは弥々華から耳を離すと、冬樹のそばに寄る。

「冬樹殿？」

「なあに、軍曹？」

「行くでありますか？ 大英博物館」

冬樹の目に宿ったのは、驚きと期待。

「もちろん行くよ！！」

※※※※

時は、巡る。

22世紀。世界はロボットと人間が共存し、宇宙を駆け回る未来都市となっていた。

開拓惑星ウエスタンも同じ様に、大昔の開拓時代の様相を残しつつ、今らしい世界を作り出していた。

このレストランも同じ。

人間とロボットでゴった返す中、1人の男が、馬を連れて現れた。身長は小学生くらいだろうか。猫をデフォルメした黄色い体躯は2等身。黒いウエスタンハットに、アメリカ国旗を模したベスト。

「よおキッド。ご注文は？」

「いつもの頼む」

西部の保安官、ドラ・ザ・キッドは出て来た巨大なドラ焼きに唇を舐めた。馬は、人参を見て唇を舐める。

キッドはケチャップとマスタードを取り出し、ドラ焼きにぶっつけた。しかも大量に。

「いただきます」

さあ、食さん。とキッドが口を開けた時だった。

「おい、キッド！ タイムパトロールから通信来てたぜ！！」
突如現れた同僚に、キッドはずっこけた。

「なんだよ、これから飯だって時に！！？」

「オレに言うなよ。それより21世紀で大規模作戦だってよ！ ロンドンで」

「わあったよ、行くぜエド」

馬ことエドは一瞬、人参を見つめたが小さくため息を着いた。

「はいなあんさん！！」

2人揃ってレストランを飛び出し、エドは翼を広げる。ペガサスになったエドに飛び乗ったキッドは勇ましく声を上げた。

「行くぜ相棒!!」

「あんさん馬使い荒いわ!」

軽妙なやりとりの中、エドが離陸。夕焼けに向かい、2人は消える。

「高いところわくわくいい!!」

実は高所恐怖症のキッドが上げた、情けない悲鳴を残して。

T o b e c o n t i n u e d

CHAPTER..2 ようこそイギリスへ

ロンドンの青空を、緑色のドッグが切り裂く。

「あれ、ロンドン塔かな？」

ドッグの窓に顔をくっつけた冬樹が指差したのは、イギリスの歴史を刻む宮殿にして要塞、そして処刑場として使われたロンドン塔。もちろんオカルト的な噂には事欠かない。

「そうだね。であれがタワーブリッジ。もうすぐ飛べば、ビッグベ
ンも見えてくるよ」

オカルト的な話題には事欠かない国に、冬樹の瞳は俄然輝く。一方、途中で購入したガイドブック片手に見守る弥々華は案外冷静だ。

そしてケロロに言われるがまま付いて来た小隊は、いまだに首を傾
げていた。

「なあ、ケロロ」

今まで数時間、じっと耐えてきたギロロが口を開いたのはそんな時
だった。

「なんでありますか？」

「なんで俺達はイギリスに来たんだ？」

「まだ秘密であります。今夜話すから、ね？」

「ね？　じゃないですよ、軍曹さん」

相変わらず菓子を――早くも国に合わせてかスコーンを――頬張る
タママはうんざりと呟いた。

「そうでござるよ、隊長殿」

珍しく連れてこられたドロロも、諭すように口を開く。

「しょうがないでありますな。弥々華殿ー」

冬樹は未だ窓の外を眺めている。弥々華は冬樹に気取られぬよう、
そっと席を外した。

「なに？」

耳をケロロに近付け、耳打ちされた言葉に頷く。

「ああ、これね」

「なんだ？　これは」

弥々華がポケットから取り出したのは、冬樹がプリントアウトした資料と同じ紙だった。

深紅の石に、全員が目を奪われる。

「この石が、どうしたですかあ？」

「これはね――」

ケロロが手早く説明すると、全員に走ったのは猜疑心だった。

「大丈夫なんですか？」

「眉唾物じゃないのか？」

「隊長殿、このような物は地球の環境に――」

「だからあ、解析してみなきゃ分かんないでありましょ？　ね、

クルル曹長」

ケロロは今まで無言を貫いていたクルルの肩を抱く。

「……隊長」

「なんでありますか？」

クルルの声は妙に乾いていた。ケロロは無意識に身構える。

「アンタアこれ、どこで知ったんだ？」

ケロロは思わず首を傾げた。

「冬樹殿のレポートであります。すっごい偶然に」

「そーかい」

クルルは陰気に笑う。

妙に精彩を欠いた言葉に、改めて首を傾げた。

その、瞬間だった。

ピーっと耳を裂くような電子音が、ドッグ内に鳴り響いた。

「なんだ！？　敵襲か？」

「かもね！」

電子音に負けないよう怒鳴り返した弥々華は、ポケットに入れていた機器を取り出す。

「なんでありますか、それ？」

「A p d s c oから貸し出されてた……なんていうんだろ？ 反応検知計？」

「なんの？」

「空間転移の時に出るエネルギー的なヤツ」

自信は無いのか、控えめに答えた弥々華は検知計の目盛りを見つめ……目を見開いた。

「あ、え？　なんで……なんで針が？」

反応は、針が振り切れんばかり。

余りの反応に、弥々華は検知計を取り落とした。

「こりゃ、異常だなあ」

クルルは弥々華が落とした検知計を眺め、喉を鳴らす。

「冬樹殿！　なんか変な物は見えないでありますか？」

「え、特には何も見えないけど……どうしたの？　軍曹」

理解していない冬樹をよそに、ギロロは1人腕を組む。

「壊れたんじゃないのか？」

「違うと思うけど」

むうと弥々華は眉間にシワを寄せ、検知計をクルルから取り上げる。

検知計の針はフラットな位置に戻っていた。

「あ、止まっている」

電子音もどこへやら。

弥々華は検知計とにらめっこしたまま、首を傾げた。

※※※※

大英博物館。

古代ギリシアの神殿にも似た壮麗な建物の前で、1人の少年が足を止めた。黒髪に眼鏡、掘りの浅い顔立ちと日本人らしい特徴を持った少年はゆっくりと空を仰ぐ。

黄色いシャツと短パンはいささかこの光景には不釣り合いだが、誰も気に止める物はいない。

「……どうしたの？ そんな深刻な顔して」

その瞬間だった。綺麗とは言い難いが温かくも味のあるガラガラ声に少年はゆっくりと振り返った。

少年の視線の先には、青を基調にした二等身が怪訝な顔で立っていた。

「うーん、なんでもないよ。はやく行こう！」

少年はそう言って、二等身の前に走り出した。

「あ、待ってよ。そんなに走ると——」

二等身の視線の先で少年が転ぶ。

「だから言ったのに……」

遅い、と言っては行けないのはお約束だからだろう。

※※※※

あの反応はなんだったのだろう、と悩む間もなくドッグは大英博物館へと辿り着いていた。

ともかく一行は人目に付かない場所にドッグを止め入場する。そしてやって来た二階の展示室は割と閑散としていた。

「これが、賢者の石？」

部屋の端の方、目立たない場所に展示された石を弥々華と冬樹は覗き込む。その石は余り大きな物では無く、手のひらに容易く収まるほど小さな物だった。

「Philosopher's Stone……間違えないと思うよ」

流暢に読み上げた弥々華をよそに、クルルはスキャンに入る。ガラステースのまま、特殊な光線を通し、スキャン開始。

「どうでありますか、クルル」

「……こりゃあ厄介だぜえ」

何が厄介なのか、そう問おうとした瞬間だった。

「あ、すみません！」

弥々華と冬樹は思わず、突然響いた声の主を見つめた。

思わず弥々華は自分を指差すと、声の主は小さく頷いた。

息を切らせ、近寄って来たのは少年だった。少年自体には目立った特徴は無く――敢えて上げるならメガネか――、至って普通の日本人と言った容貌だった。

だが、その連れは個性の塊とも言える風貌だった。

まず、大切なのは人間では無いということか。

大きな頭とそれを支える寸胴の体、比率はいわゆる二等身。色彩は青と白を基調としており、首輪らしい赤と鈴の金色が綺麗なコントラストを描いている。

「……狸？」

率直に漏らした弥々華の感想は、なかなか的確を射ていた。

「失礼な！　ぼくはドラえもん。猫型ロボットだぞ」

速攻でその狸、もとい猫型ロボットは反応を見せた。

「ドラえもん、落ち着きなよ」

「……のび太くん」

少年に促され、ドラえもんと呼ばれたロボットは静かに落ち着きを取り戻した。

「あの、ぼくたち迷子になっちゃって……出口はどこですか？」

「出口なら下に――」

そう冬樹が口を開いた、瞬間だった。

「なんですかあ!？」

不意に響いたのは轟音。

地面が揺れる。

「ドラえもん!！」

「落ち着いて、のび太くん」

「なに、地震？」

「んな生易しいものじゃなさそうだぜえ」
クルルはくくつと笑う。

「ともかく、行くぞ」

ギロロに促されるがまま、7人は走り出した。

「……どうしよう」

のび太は7人の背中を見送ったまま、所在なさに呟いた。

「追い掛けよう」

ドラえもんの言葉に、とりあえず2人も走り出した。

※※※※

ガラスの破片は飛び散り、土産物屋は破壊され。

正面玄関から突っ込んだ鉄塊は、博物館に致命的なダメージを与えていた。

その鉄塊は、真横に巨大な髑髏が刻まれた戦艦。

なにがどうなったという顔で鉄塊を見詰める聴衆の真ん中で、扉は静かに開けられた。

「……おやま、壮観だなあ！」

ははつと笑った青年のコートが靡く。

と、同時に扉から溢れ出したのは人、人、人。見事に野郎ばかりの集団に、青年は激を飛ばす。

「金になるもんは全部奪い取れ！　だが忘れるな、本来の目標は賢者の石だ！！」

「「「アイアイ！　船長！！」」」

男達の野太い返答に青年は満足げに頷いた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674ba/>

Cross universe 2 ～時空を超えた友情～

2012年1月8日01時54分発行